

石郡英一の

## “老話”

介護職に聞いてほしい  
高齢者と家族の物語

## 第1話

おばすてやま

## 姨捨山①

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のできる仕事術』（いずれも日総研出版）がある。

## 1. おとぎ話

「ただいま！」

生子が仕事から帰ると、母親の由紀子が玄関先で出迎えた。「ちびっ子たちがストライキを起しているよ」

由紀子はそう言って笑った。「今度は何の交渉かしら？ 小遣いの賃上げ交渉？」

生子は由紀子のジョークに応じてみせたが、内心は気が気ではなかった。リビングに入ると、交渉に構えるちびっ子団が、用紙をテーブルに置き、腕を組んで仁王立ちしていた。

「どうしたの？」

生子が口火を切ると、待っていましたとばかりにちびっ子団長が応戦した。

「お母さん！ 今度の参観日は絶対来てよ！ うちはお婆ちゃんばかり参観日に来るじゃないか！ お婆ちゃんが参観日に来るのは、僕の家だけなんだから！」

小学校3年生の誠が、テーブルの上に置いた参観日の案内用紙を叩いて抗議した。

「私もお母さんに来てほしい！」  
今年小学校1年生になった孝子も同調した。

「マコちゃん、タカちゃん、2人とも無理言わないで…、お母さんも行ってあげたいけど、お仕事があつてどうしても行けないの…ごめんね。お婆ちゃんから2人の学校での様子は聞かせてもらうから…」

働いている生子にとってこの手の交渉は、痛いところを突かれるものなので不利である。したがって生子は、自分にとって不利な展開となる子どもたちとの交渉を収める方法として、いつも話をはぐらかし、飴で釣るように仕向けるのである。

「そうだ！ 2人に良いお話を聴かせてあげましょう！」

「何?! 何?!」

「さあ、ソファーに座って…おいしいココアでも飲みながら、お母さんのおとぎ話を聴いてちょうだい…」

「ココア！ ココア！」

生子は牛乳を温め、ココア粉に砂糖を少し多めに入れたカッ

プに並々と牛乳を注いで2人の前に置いた。

「さあおとぎ話の始まり、始まり…長野県の北信地域に伝わる、姨捨山というお話です…昔々あるところにたいそうお年寄りのことが嫌いなお殿様がおりました。そこでお殿様は60歳になったお年寄りを山に捨てるよう国中におふれを出しました。ある時、男がこのおふれに従って、60歳になった母を背負って山に捨てに行きました。山を登っていく途中、母親は、木の枝を折って道に捨てていきました。男が母親を山に捨て帰ろうとした時、道に迷ってしまったため、母親のところへ引き返すと“枝を折って道に捨てておいたから、それを目印に帰ると良い”と言われました。母親は男が山を降りていく時、道に迷わぬようにと枝を折り捨てておいたのです。捨てられる身でありながらなお、男を想うこの母親の深い愛情に心打たれ、男は母親を捨てるのをやめ、家に連れて帰りました。

しばらくして隣の国が“灰で縄をなえ！ さもなくばお前の国を攻める”と言ってきました。困った殿様は“誰かこの答えが分かる者はいないか”と国中におふれを出しました。その話を聞いた男が、年老いた母親に尋ねると“塩水に浸した縄をなっ

て焼けばよい”と教えられました。その教えどおり灰の縄を作り、殿様に差し出したところ、

難を逃れることができました。それでも隣の国は諦めず、今度は“曲がりくねった穴の開いた玉に糸を通せ”と言ってきました。また男は母親に尋ねると“穴の一方に餌をぬり、反対側の穴から糸を付けた蟻を放せばよい”と教えられました。その教えどおり玉に糸を通してみせると、隣の国は“こんな知恵者がいる国には敵わない”と攻めるのを諦めました。

お殿様は大喜びで、男に褒美を取らせると言いましたが、男は“知恵は年老いた母が授けてくれたものです。お殿様、お年寄りはいたいそう知恵を持っております。褒美はいりません。その代わりお年寄りを捨てるのをおやめいただけませんか？”とお願いしました。お殿様はたいそうお年寄りの知恵に感心し、その後、お年寄りは捨てられることなく、皆から敬われるようになりましたとさ…めでたし、めでたし

「へ～お婆ちゃんって凄いんだね！」

「そうよ、お婆ちゃんは凄いのよ！ お婆ちゃんに参観日に来てほしい人！」

「はい！」

誠と孝子は、それ以来、祖母の由紀子が授業参観日に訪れるのを嫌がらなくなった。

## 2. 誘い

<1>

それから月日が流れ…

日比生子は今年76歳になった。夫は10年前に他界。子どもは一男一女がいるが、それぞれに独立し別居しているため、生子は現在、東京都江東区にある自宅で一人暮らしをしている。

現役時代生子は教師だった。生子の父が小学校教師であったことから、父の強い勧めで生子も教師を目指し、23歳で都立高校の国語の教師となった。

生子が25歳の時に、大学で同じゼミを専攻していた日比雄二と偶然にも再会。その後恋愛に発展し、28歳で結婚。結婚後は生子の実家で、生子の両親と同居することになった。

その後生子は、29歳の時に長男誠を出産、2年後の31歳の時に長女孝子を出産し一男一女に恵まれた。

子どもが小さい頃、生子は日中の子守りを、主に専業主婦であった母由紀子に任せて教師の仕事が続けた。そのお陰で生子は、子育てをしながら60歳の定年まで教職を勤め上げることができた。

生子の父は、生子の定年前に享年85歳で他界し、翌年、父の後を追うように享年86歳で母由紀子が他界した。

夫雄二は、商社を定年後、夫婦共通の趣味であった家庭菜園や読書を楽しみ、まさに晴耕雨読の日々を過ごしていたが、65歳の冬、くも膜下出血で急逝した。

長男誠は今年47歳となった。大学卒業後に横浜の家具を取り

扱う企業に営業職として就職。その後結婚し、横浜市中区に購入したマンションで、パート勤めの妻良子と小学校6年生の長男隆ならびに小学校4年生の次男盛雄との4人暮らしである。

誠の妹で長女の孝子は今年45歳となった。大学卒業後に都内港区にある建設会社の事務として就職。その後、2歳年上で職場の同僚であった加納修一と結婚。姓が変わり加納孝子となった。現在は東京都北区に居を構え、夫と高校2年生の長女茜と3人家族である。

<2>

誠が生子の異変に最初に気づいたのは、1年前のことだった。

12月初旬、雄二の7回忌に生子と深川にあるお寺に法要に出かけ、法要を済ませた後、約1km先、歩いて10分ほどの納骨堂まで向かう途中、生子が誠に問いかけた。

「お父さんが亡くなってからどれくらい経つのかしら？」

「7回忌だから、丸6年になるね」「そう…丸6年…」

この会話だけを聞いていると、何もおかしくは思わないのだが、生子はこの問いかけを納骨堂までの10分間に3度繰り返したのである。

この時誠は“おかしい”と肌で感じたが、誠や孝子の家族、親戚一同が集まって歩く道中、皆に知られまいと、咄嗟に“何回も同じこと聴かないで”という言葉を飲み込み、その場は自

分の胸に取めた。

その後、納骨堂のお参りを済ませ、近くの仕出し屋で行った会食の場において、孝子を隣に呼び耳元で先ほどの話を手短かに話し、週2回ほど、見守りのために生子に電話をするよう頼んだ。

しかし年も明け2月になると、孝子の定期的な電話でも、生子は壊れたテープレコーダーのように、同じことを何度も繰り返すようになったという。

誠はその話を孝子から聴いてさすがに心配になり、2月中旬に思い切って近くの心療内科クリニックに生子を連れて受診した。

結果は予想どおり、認知症の尺度を計るテストMMSEの結果が17点で、医師から認知症の疑いがあると診断された。

「まだはっきりとは言えませんが、認知症の疑いがあります。紹介状をお書きますので、一度総合病院の精神科を受診され、きちんと検査されることをお勧めします」

医師の診断に誠は動揺したが、同席していた生子は認知症の意味が理解できていないのか、動揺している様子が見られないため、誠はいささか安堵した。

クリニックの受診から1週間後、紹介状を持って、誠は生子を連れて総合病院の精神科を受診した。

生子はMRI検査を受けたところ、海馬の萎縮が見られたため、医師から認知症と診断された。進行度はまだ初期段階というこ

とだった。

生子はここでも病名ならびにその進行度を知らされるが、クリニックで診断を受けた時と同じく、「仕方ないわね」と医師の説明をさらっと受け流した。

診察後、薬が処方され、以降の定期受診を勧められたため、誠は定期受診の付き添いを、専業主婦である孝子に依頼することにした。

その後、生子は孝子の付き添いの下、初めは初期段階の経過観察のため1週間に1度、2カ月目は2週間に1度、3カ月目からは1カ月に1度、総合病院を受診するようになった。また、生子と誠が総合病院を受診した際、受診とは別に、医師から病院付属の居宅介護支援事業所を紹介された。そこで生子はケアマネジャーより介護認定を勧められ、言われるがまま介護保険の認定調査を受ける運びとなった。

認定調査の1カ月後に、生子は要支援2の要介護認定を受けるに至った。認定調査を受け、要介護度が決定すると、生子の生活にはさまざまな人が介入してくるようになり、生活の風景が一変した。

まずは介護保険を利用するようになり、週1回掃除・洗濯の訪問介護の利用と、トイレの改修、手すり・ベッド・シルバーカーなどの福祉用具の貸与、さらにはリハビリテーション目的で近所のデイケアに週2回通うようになった。

日常に必要な生活物資のほとんどは、孝子が週に1回実家に出向き、家にある生活用品をチェックして、スーパーの宅配サービスに依頼することにした。

食事は介護認定を受けるまで、三度三度生子が手作りで行っていたが、介護度が決定すると、生子が調理する場面はめっきり減った。

誠が火気は危ないと口出しするようになり、誠の意向でガスを電気コンロに切り替え、朝食以外は地域の宅配弁当を注文するようになった。デイケアのある日は夕食のみ、デイケアのない日は昼・夕食と頼んだ。朝食も、孝子が宅配サービスで注文するスープなどのレトルト食品と、野菜などの食材を使ってサラダなどをつくって軽く済ませるようになった。

初めのうちは、介入者の多い生活に、窮屈さを覚えていた生子であったが、半年も経つと、そんな生活にも馴染むようになった。

そんなある日、孝子から誠に電話がかかってきた。

「お兄ちゃん、お母さんの件だけど…お母さん、より忘れっぽくなったり、私に頼ることが多くなったりと、少しずつ認知症の症状が進んできているように思えるの…これからますます自宅での生活も難しくなるだろうし、かといってお兄ちゃんの家や私の家で同居というわけにもいか

ないだろうし、もうそろそろ介護施設への入居を考えた方がいいんじゃないかと思うんだけど…」  
「そうか…そうだよね…。お前にはお母さんの受診や身の回りの世話、定期的な見守りの電話など迷惑をかけているしなあ…」  
「迷惑だなんて……、誤解しないでね。お母さんを支えるのは、娘として当たり前のことだと思ってるのよ。ただ、毎日付き添ってあげることができないから、これからのことが心配になったの。介護施設なら誰かが見ていてくれるでしょ。だから安心じゃない。入居の費用はお母さんの年金を当てれば支払っていけると思うの。このこと、今度、お兄ちゃんからお母さんに言ってくれない？」

「分かった。話してみるよ」

<3>

「お母さん、孝子も心配しているし、お金のことは心配しなくても大丈夫だから、介護施設に入居してはどう？ 最近物忘れもひどいし、いつ倒れるかも分からない体で、これからもずっとここで一人暮らしを続けていくわけにもいかないでしょう?!」  
「9月に入っても、何だかまだまだ暑いわね。ところでマコちゃん、何かさっぱりした物でも食べたくない？ お母さんそうめんでもつくるから、家で食事でもしていかない？」  
「お母さんは昔からそうやって、いつも話をはぐらかす……。あ～、もうこんな時間だ……。最

近、孝子がお母さんを説得するようになってるさいんだよ。今日は仕事で家の近くまできたから途中で寄ったんだけど、これから会社に戻らなければいけないからそうめんはまた次回にして、今日はこれで帰るね。今度は孝

子と一緒に来るから、それまでによく考えておいてね」

“何度説得に来てても同じ…私はここから動きませんよ”

生子は心の中でそう叫んだ。  
「お母さん一人の問題じゃないんだよ。“負うた子に教えられて浅瀬を渡る”ってことわざもあるけど、いい加減子どもの言うことにも耳を傾けてよ」

18時を少し回った頃、生子の長男誠は、そう捨て台詞を吐いて、一方的に生子に要件だけ伝えたと、訪問してから30分も経たないうちにそそくさと実家を後にした。

誠が台風の如く立ち去った後、生子は大きなため息をついた。  
「どうして介護施設、介護施設と言うのだろうねえ……。お金はかかるし、この家のことだってあるし、お墓だって守らなきゃいけないし……。何が“負うた子に教えられて浅瀬を渡る”ですか！ 私は小さい身体ですが、まだ浅瀬ぐらい渡れます。ここで十分生活していけますよ！」  
「こんにちは」

町内会に所属する山田恒子が、



有料老人ホームを紹介するため、生子の家を訪れたのは、生子が認知症と診断されてから7カ月ほど経った9月の初旬だった。

恒子は生子より3つ下で今年72歳になる。恒子も生子と同じくこの地で育った生粋の下町江戸っ子である。小さい頃から「恒ちゃん」「生ちゃん」と呼び合う気心の知れた仲だった。

恒子は現在民生委員をやっていてということもあり、生子の家には月に2～3回、1回に30分程度、生子の様子をうかがいに定期的に訪問していた。

その日も恒子は生子の家の玄関先に腰かけ、世間話などをしながら、生子の様子をうかがっていたが、徐々に有料老人ホームの話を切り出した。

「実は、先日誠ちゃんがこの家を出て行く時、表でばったり会ったの。その時立ち話で少し話をしたのだけど……。いろいろ誠ちゃんも生ちゃんのこと心配していたわよ。ずっとここで一人暮らしをさせておくのは心配だって……。そこで誠ちゃんから、“母に合った施設があった

ら紹介してくれませんか？”ってお願いされたの。そこで今日はね、深川にある有料老人ホームを紹介しようと思ってパンフレットを持ってきたのよ」

玄関先に「えみの里」という名前の、住宅型有料老人ホームのパンフレットが広げられた。「この会社の社長さんは、生ちゃんの同級生の吉田徳治さんよ。懐かしいじゃない。吉田さん、建設会社を立ち上げて50年は経つかしら？ 最近では介護事業も始めたようで、深川を中心に有料老人ホームを何カ所も経営してるんですって。施設の評判もとても良いみたいで、どこもすぐにいっぱいになるらしいの。このえみの里という施設は半年前に建ったばかりで、まだ少しお部屋が空いているんですって。このお家から5km先のところに建っているのよ、家に帰ろうと思えばタクシーに乗って10分程度よ。ところで吉田さん優しい方だったわよね…。ほら、パンフレットの社長あいさつの写真を見て！ 恰幅は良くなったけど、昔の面影が残っていると思わない？ 施設も写真で見ると綺麗よね。食事もおいしそうじゃない?! ……実は先日、懐かしさもあって吉田さんに連絡を取ってみたの。そうしたらいつでも見学にお越しくださいって言ってたのよ。せっかくのお誘いだから、生ちゃんさえ良ければ、誠ちゃんに連絡して見学の日程を決めた

いのだけれど、いかがかしら？」

恒子は訪問セールスのように有料老人ホームを勧めた。

生子は吉田の顔写真を見て、小学校時代の懐かしい思い出が甦ってきた。

実は、生子は小学生の頃、父が小学校教師であったことから、学校で先生に褒められると、よく男の子たちに囲まれて「コネ女！」といじめられることが多かった。そんな時、クラスの中でもリーダー格だった吉田が、いつも「弱い者いじめはやめろ！」と中に割って入り、生子をかばってくれていたのである。

そのような思い出もあり、生子は以前から吉田を好意的に思っていた。その吉田が経営する介護施設という話に、生子は興味を抱いた。

生子が興味を抱いたことから話は急展開し、恒子が訪問してから1週間後の日曜日、有料老人ホームえみの里に見学に行く運びとなった。

1週間後の日曜日、生子、誠、孝子、恒子の4人でえみの里に見学に出かけた。えみの里に着くと、石田と名乗る愛想の良いホーム長が出迎えてくれた。「日比様ですね。弊社社長の吉田より話はうかがっております。後ほど吉田もこちらへ来ると申しておりましたので、それまでは私が、ホームをご案内させていただきます」

石田は穏やかな物腰の男で、生子をはじめ4人は好印象を受

けた。

住宅型有料老人ホームえみの里は鉄骨構造の4階建てで、居室は2～4階に36室あった。1階は介護用機械浴場や事務室、応接室、倉庫、リネン室などが設置されていた。居室入口や居室内床・トイレの仕切り、廊下、腰壁、幅木などに木を用いており、モダンな感じを受ける。各居室は13m<sup>2</sup>あり、トイレ・洗面所や空調機が設備され、ベッドや床頭台、ナースコールなどの備品が設置されていた。壁紙の色はアイボリーで清潔感にあふれ、落ち着ける空間を演出していた。

「当ホームでは食事、入浴、排泄の介護を中心に、日常生活を整えさせていただいております。介護を必要とされるご入居者におかれましては、当社えみ居宅支援事業所のケアマネジャーがケアプランを作成いたしまして、その方に合った形で、訪問介護のサービスをお受けいただけます。食事は管理栄養士による栄養価を考慮した食事をご提供いたしております。入浴はお一人様週2回以上お入りいただけます。ご自分で入浴できる方では、各階に設置されている個別浴槽で、介護が必要な方は1階の介護浴槽でお入りになれます。ご自分でお入りになれる方で毎日お入りになる方もみえます。また、当ホームでは月に2度、内科の訪問診療を受けることができます。その上、介護士のほ

かに看護師を2人配置いたしておりますので、日々の血圧測定や服薬指導などを通じて、日常生活をより健康的に安心して過ごしていただけます。また年間を通してここでの暮らしを楽しんでいただくために、1月はお正月会と称し、福笑い、すごろくなどを行い、2月には節分会における豆まき大会、3月は雛祭り会と称して、近所の幼稚園児との触れ合いを催すなど、さまざまなレクリエーションもご用意いたしております……」

石田の説明は淀みなく、柔和な語り口調で4人を魅了した。「こんにちは！」

時折4人とすれ違う、エプロンを着用した介護士と思われるスタッフも礼儀正しい。「こんにちは。お騒がせして申し訳ございません。本日、ご見学にお見えになった方々ですので、よろしく願いいたします」

ホールにお見えになった数人のご入居者への石田の対応も、4人に対する態度と何も変わらず、好感の持てるものであった。

石田から案内を一通り受け終わると、タイミング良くひょっこりと吉田が現れた。

「お待たせいたしました。生ちゃん、恒ちゃん、昔と変わらないね……。ご無沙汰いたしております。吉田でございます」

吉田は親しげに言葉をかけ、丁寧に頭を下げた。

その後吉田は応接室に4人を誘導し、あいさつを交わし、お

茶を振る舞った。4人それぞれとあいさつを交わした時、吉田の指し出した名刺には、株式会社えみの介護サービス代表取締役社長と肩書が書かれ、裏に15カ所の施設名が記されていた。

「早速ですが、ホームをご見学いただいていたかでしたでしょうか？ 率直な感想をお聞かせください」

吉田が感想を求めると、誠がそれに応じた。

「いや、私が想像していた以上に素晴らしい施設で驚きました。有料老人ホームというイメージが明るいものになりました。何よりホーム長をはじめとするスタッフの皆様の丁寧な対応には頭が下がりました。入居に要する費用も母の年金で払えそうですし、これだけの施設やサービスが付いていれば安いものだと感じました。母ともよく相談いたしますが、正直母がここに入ることができれば良いと思えました」

誠の発言は、見学した残りの3人の思いを代弁しているものであった。

頑なに拒否していた当の生子も、吉田に再会できた喜びに、“ここに入れば吉田に会える”という思いや、吉田に抱く安心感と、施設の造り、職員の対応に好印象を抱き、入居への思いが強くなった。



「お母さんはどう感じたの？」

孝子が生子に問いかけた。

「そうね…良さそうな所ね…」

生子のこの言葉に、付き添っていた3人は入居の言質を得たとばかりに、吉田と具体的な話に取りかかった。

その後も生子が乗り気となったことで、入居の話はトントン拍子に進み、その場で生子は仮契約の手続きをするに至った。

それから1カ月間、孝子が付き添いながら、電気やガス、水道、新聞などを停止する段取りや、住所変更や役所への届け出、銀行口座の預かり、入居への手続きなど、さまざまな準備を整えた。

生子の入居後、自宅をどうするのか決めかねていた生子と子どもたちは、とりあえず自宅にセキュリティシステムを導入することに決めたが、生子が鍵を持っておきたいと言うので、スペアキーと合わせて3本を、生子、誠、孝子の3人が持ち合うことにした。

そして晴れて1カ月後、誠と孝子に連れられて、生子はえみの里へ入居することになった。

(次号に続く)